國學院大學学術情報リポジトリ

# 滑稽本におけるノダとその周辺：特集多様化する日本語研究の現在



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-05 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 鶴橋, 俊宏, Tsuruhashi, Toshihiro |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000419 |

# 滑稽本におけるノダとその周辺

鶴橋俊宏

## はじめに

本稿は、ダロウ成立史の手がかりを得ることを主たる目的として、関連するノダおよびその周辺について調査したものである。

これまでの調査で、現代語でノダの推量形と言うべきノダロウについて、安永期からその用例の存することを確認した。今日ノが必須となるナゼなどの疑問語を含む場合、ノを介さないダロウが用いられ、文政期頃にナゼ～ノダロウも出現するが、ナゼ～ダロウと併存したままであった。

これは、現時点で、ダロウ、ノダどちらの側の問題なのか不明である。そこで、一方の側のノダを調べ、解明の手がかりをさぐることとする。

## 一

江戸語のノダを扱ったものに土屋信一（一九八七）がある。それによると、ノダは近世初期から現れ、化政期以降のノダについては次のような指摘をしている。

a　現代語と同じような形式と内容を持っている。
b　「前に示された事情に説明を添え断定する表現である。」
c　現代とは異なる、ノが体言の代用として使われたものがある。

bは現代語の研究においてノダの中心的意味用法とされ、「説明のノダ」などと称されている。cに関しては、ノダロウの出現当初（安永期）にも同じような例があることを拙稿（一九九八）で述べた。しかし、aについては、どのような点で現代語と同じ形式であるのかは不明な点があり、この点を確認する必要性を感じる。

また、ノを介さない、活用語に直に付くダ（以下、活用語ダ）があり、これをノダの前段階という可能性を指摘している。土屋（一九六九）では、活用語ダのほとんどはノダと置換可能と述べ、指定の機能はないとしているが、所謂準体句を承けるものである可能性があるとしてこの考えを転換している。土屋は活用語ダがダロウ成立に関わるのではないかとの考えを示しているのでこの点も調べる必要がある。

以下、ノダの意味用法は既に論があるが、構文的な特徴には触れられていないので、これを観察することに力点をおいた。本来ならば、近世後期江戸語全般にわたって調査すべきであるが、先ずは先学の説によりノダの例が豊富なことが知られている化政期を中心にその実態を報告することにする。

## 二

本論に入る前に資料について述べておく。

本稿では文化、文政、天保期の実態を調査する。今回この時期選んだのは、ノダやそれに関連する語の研究がかなり詳しくなされており、その成果を参照することが問題の所在を明らかにすることが有効と考えたからである。

この時期の江戸語研究資料としては、滑稽本（後期滑稽本、中本）が質量ともに豊富とされる。吉丸雄哉（二〇一五）に挙げられているように、多くの滑稽本が存在する。そのどれを選べば当該の課題に答えるのに最適かという評価をすることが江戸語研究にとって重要で、それが「質」である。それを評価するのは容易ではないが、現時点で次の点が、信憑性を評価する第一歩と考えている。

作者の言語経歴　→土地の言語を正確に把握しているか
作者の社会的階層　→位相を正確に反映できるか
観察能力・描写能力

今回取り上げた江戸の庶民層出身である式亭三馬、滝亭鯉丈、為永春水はこれを満たす蓋然性が高いと思う。十返舎一九を外したのは、拙稿（二〇〇七）で述べたように、その江戸語に疑問があるからである。しかし、能力があることと表現することとは同じではない。文体や内容によって選択される言語形式が異なることがあり得る。一口に滑稽本と言っても、同じジャンルであっても扱うトピック、表現手法は同じではない。作品の内容と言語要素の出現状況に相関関係を導くのは甚だ困難であるが、異なるタイプのものを広く網を張って、しかる後に改めてこの問題にアプローチしたいと思う。

そこで今回は以下の作品を対象とすることにした。[1] 鯉丈、春水の滑稽本には「茶番」物と「旅」物（膝栗毛物）があり、物真似や落語をベースにする三馬作品とは会話のスタイル・文体が異なるのではないかとの予測を立てたものである。ただし、これらの膝栗毛物は、江戸の近郊であり、一九のような方言によるおかしみを主眼とはしていない。

・式亭三馬（安永五　一七七六～文政五　一八二二）作品
『浮世風呂』（文化六～十）　早稲田大学古典籍データベース　活字・『新日本古典文学大系』86（一九八九、岩波書店）
『浮世床』（文化十～十一）　早稲田大学古典籍データベース　活字・『日本古典文学全集　洒落本　滑稽本　人情本』（一九七一、小学館）
『四十八癖』（文化九～文政一）　東京都立中央図書館蔵本活字・本田康雄校注『新潮日本古典集成（第五二回）浮世床　四十八癖』（一九八二、新潮社）
・滝亭鯉丈（?～天保十二　一八四一）作品
『栗毛後駿足』（文化十四～文政五）『膝栗毛文芸集成』19（二〇一四、ゆまに書房）　活字・『十返舎一九全集4』『大山道中膝栗毛』[2]（日本図書センター、二〇〇一）
『浮世床』三編（文政六）　早稲田大学蔵本（古典籍総合データベース）　活字・帝国文庫『三馬傑作集』（博文館、一九〇二）
『花暦八笑人』（文政三～天保五）　早稲田大学蔵本（古典籍総合データベース）　活字・岩波文庫『花暦八笑人』上下（岩波書店）

『滑稽和合人』（文政六～弘化元刊）初編～四編早稲田大学蔵本（古典籍総合データベース）活字・帝国文庫『滑稽名作集』（博文館、一九〇九）

『温泉土産箱根草』初編・二編（天保十五）『膝栗毛文芸集成』22（二〇一四、ゆまに書房）活字・『神奈川県郷土資料集成10　温泉土産箱根草』（一九八三、神奈川県図書館協会）

・為永春水（寛政元　一七八九～天保十四　一八四三）作品

『温泉土産箱根草』三編・四編（弘化二年刊）テキストは右に同じ

刊年は約四十年のスパンがあり、作者も十五年程度の世代差があり、当然その間の言語変化は考慮されなければならないが、先ずは化政・天保期の共時態として捉え、経年変化の相を観察するのは過去に遡って記述を蓄積した後に行うことにする。

## 三

まずノダの例を見る。江戸者の会話のみを対象とし、文末のノダ（ンダ一例含む）という形のみを扱い、疑問ノカ、否定ノデハナイなどは対象外とした。また、次のような代名詞的なノを含むと解せられるノダは扱わないことにする。[3]

（1）ドレ〳〵土龍が本なら液をつけて穴をあけてやらうびん「よさつし。貸本屋から借たのだ」『浮世床』二編下二十五オ5（360—14）（括弧内は活字本の所在、以下同）

ノダの文は、現代語研究で盛んに論じられており、様々な論が展開されているが、田野村忠温（一九九〇）など、題説構文の説明部分であることは異論が無いようである。そこから、ノダの基本的用法は、「あることがらの背後の事情を表す」などと説明される。（以下、「説明」）次の用例（2）（3）がこれである。

（2）宮二「ヲイ〳〵何かあるそうで大分人が走るゼ」塔「ハヽ、ア船が出るのだ。」『箱根草』初編下155下10（124—2）

（3）ム、この手紙ハ半さんの手だハ。ヲヤ〳〵どういふ心いきだの。マア読んで見ようや「トひらき見て」ヲヽ酔った手だのう。帳場の筆を借て書いたのだ。『四十八癖』

三編二十ウ7（312—12）

用例（2）は「人が走っている」という状況に対し「船が出る」という判断を示したもので、同一文中に主題が提示されてはいないが、題説構文の説明部分と解し得る。用例（3）は手紙の筆跡が乱れていることを理由を述べたもので、やはり同様の構造を持っている。拙稿（一九九八）に述べたように、「説明」のノダロウは安永期からのの用例を確認している。その際に次のように示したが右と同じ構造である。

（或る既定の事柄に対して）原因理由・背後の事情・問題の実状ノダロウ

一方、この形にはまらないものもある。「状況との因果関係」を持たないなどと説明されるものである。用例（4）は大川橋の身投げ茶番における後見役の役割を述べたもので、状況に対する説明ではなく、主張・断定・決意を述べていると解せられるものである。（以下、「断定」）

（4）なりたけ人にあやしめられるよふに。欄干へ寄かゝツたり何かして居て。いゝ時分に。ポイと引ぬきで。まつぱだか。緋褌一ツに成て。其時後見が。著物の始末さへ。してくれればいゝのだ。さらりと髪を乱して。ポンと川へ飛込むのだが。ソリヤ身投だといつて。橋も川も大騒ぎに。なるだろう　『八笑人』三編下*十ウ7（144—7）

同様に状況との因果関係を示さないで、聞き手に行為を促すもの、すなわち命令のノダも見いだすことができる。（以下、「命令」）現代語の研究でも論じられているが、ノダの基本的・中核的用法からいかに派生したか定説を見ていないようである。

（5）コレ松やこゝをかたづけるのだよ　『四十八癖』四編五オ（339—8）

状況との因果関係があるもので、原因・理由を確定条件句として提示しているもの（以下、「条件」）や、疑問語と共起するもが相当数含まれていた。これらは、ノによってそれらを焦点としていると説かれる。

「条件」の例は以下のとおりである。

（6）着物がきたねへの。内が貧乏だのと。がきの口からいふことばじやアねへ。てめへたちは云て聞せるからいふの

だア。『浮世風呂』二編下十オ6（119—10）

（7）おらが伯母御などは不仕合で独身になつ居るからおれがはごくのむのだ。『浮世床』初編下三十八ウ2（311—13）

（8）おめへは後生が能から。それでつかねへのだ。気のいゝ者ア。おはぐろが早くはげるとさ。『四十八癖』後編二十三ウ7（276—1）

（9）おつな口をきゝたがるから。まちげへ斗りいふのだ。『浮世床』三編下二十一ウ2（386—3）

（10）あんまり甘口にするからふざけるのだ。『八笑人』二編上十ウ4（75—5）

（11）今買つても邪魔だから帰りに買ふと言ふのだアな『和合人』四編中十五オ7（436—6）

（12）ヱヽ何の夫が物馴なひから安房上総の浦のけしきを松嶋か象潟の景色でも見た様に仰山に騒ぐのだ『箱根草』初編上25・1（134下6）

疑問語は、ナニ・ダレ・ドコなど不定称代名詞（以下、「不定」）と、ナゼ・ドウシテ・ナニユエなど原因理由を問う副詞（以下、「ナゼ」）とがある。現代語で、前者はノが必須ではないが後者は必須である。江戸語のノダロウについて言えば、前者は寛政期、後者は文政期から用例を見る。

「不定」のノダの例は次のとおりである。

（13）コレ〳〵何を唄ふのだナ。『浮世風呂』三編下十ウ6（188—7）

（14）コレ主人。あの書たものは何にするのだの『浮世床』初編上*十オ1（268—3）

（15）どけへいつたのダ。『八笑人』三編下*二十三ウ2（154—3）

（16）左次「ムン足下ハどこに居るのだ　卒「おいらは又別に妙な船をたのんで。独り別にいるのサ『八笑人』三編下六オ7（141—7）

（17）翌の晩ハ何所へ泊るのだ『箱根草』二編下262・4（186下7）

用例（13）は、歌っているものを聞いているのではなく、湯の中で歌うのを咎めている例である。内容的には次の「ナゼ」に入るものである。

・「ナゼ」のノダの例

(18)そんならなぜうたふのだ　『浮世風呂』三編下十一オ1（188—9）

(19)ナゼ其様にほうきをふり上ゲるのだ　『栗毛後駿足』初編上50・7（60—2）

(20)なぜそんなむづかしい手拭を冠のだ　『八笑人』二編上四ウ3（69—9）

(21)しかしその仕掛なら。竹の巾や長さは。大体い、かげんで宜さすなものだ。ナゼ其やうに寸法がむずかしいのだ　『和合人』三編上十ウ7（379—7）

(22)どうして呼のだ早くいはつせヘナ。　『和合人』三編上二十二ウ5（380—13）

以上をまとめると、ノダの用法は次の様に分類できる。ただし、これらはノダロウの発達段階から示唆を得たもので、史的変遷を視野に入れつつも後の説明のために設定した便宜的なもので、ノダの意味の派生関係を示したものではない。

平叙文　条件句を含まない　状況との因果関係をもつもの「説明」

状況との因果関係をたないもの「断定」「命令」

条件句を含む「条件」

疑問文「不定」「ナゼ」

それぞれの用例数を示すと次の表のようになる。用例数には繰り返しを含んでいない。

| | | 説明 | 断定 | 命令 | 条件 | 不定 | ナゼ | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 三馬 | 浮世風呂 | 3 | 10 | | 6 | 5 | 2 | 26 |
| | 浮世床 | 6 | 19 | | 3 | 1 | | 29 |
| | 四十八癖 | 4 | 6 | 1 | 2 | 1 | | 14 |
| 鯉丈 | 栗毛後駿足 | 4 | 6 | 1 | 10 | 9 | 4 | 34 |
| | 浮世床三編 | 1 | 4 | | 2 | 3 | | 10 |
| | 八笑人 | 3 | 9 | | 19 | 34 | 11 | 76 |
| | 和合人 | 12 | 6 | 1 | 17 | 31 | 7 | 74 |
| | 箱根草一二編 | 11 | 10 | | 8 | 8 | 2 | 39 |
| 春水 | 箱根草三四編 | | 2 | | 2 | 7 | 1 | 12 |

ノダの用法は、作者、作品による偏りが無いことが見てとれ

る。これらの諸形式が全てこの時代一般的であったと言えよう。

言語量が同じではないので、単純に比較できないが印象として、鯉丈は三馬よりもノダを多く使っていると見える。『浮世風呂』には女性の会話が多く、位相的偏りが起因すると思われる。茶番劇の相談など、自己の主張をする場面が多いこともあるが、これが鯉丈のスタイルであることも見逃せない。木坂基（一九七三）は、近代文芸について

「のだ」文は、現象文の事実的客観的叙述とは対照的に、主観的・感情的色合いをおびることになる。

と述べ、ノダ文が私小説的手法の中で文体的地位を占めるようになっているとしている。もちろん、これは地の文の文体のことであり、江戸文芸にそのまま当てはまるわけではない。しかし、江戸語においてもノダのような文末のムードに関わる要素は、会話のスタイル、文体の違いを決定する重要な要素の一つであろう。そして、それは他の言語要素の出現にも同じ事が言える。例えば、三馬の作品にはノダロウ、確認要求のダロウが非常に少ないが、鯉丈の作品には比較的多く見られる。[4] もちろん、それらの相関関係は俄に証明できるものではないが、ある言語形式の有無、多少を観察するためには、叙述のスタイル、文体を無視すべきではないことを物語っている。ノダは比較的頻度が高いが、使用頻度の低いものは結果に大きく影響すると考えられる。

現代語ノダの研究では、ノダにはムードのノダとスコープのノダとがあるとされる。「条件」「不定」「ナゼ」は後者に属する。今回の調査では後者が相当数含まれている。この二つのノダは、文化～天保頃のノダに既に備わっていたと言えよう。その意味で、化政・天保期のノダはたしかに現代語と同じような形式を備えていたと言えよう。

## 四

江戸語の終助詞サについては 長崎靖子（一九九八）の論があり、指定辞相当の機能があり、丁寧な文体で使用されると指摘されている。引かれた用例を見るとノサが見られるが、長崎説に従えばノダ相当ということになろう。今回の調査でも、前掲用例（16）のように「断定」のノダに相当するノサが見られた。しかし、「説明」は見いだせず、ノサが題説構文に還元できるか否かはなお検討の余地がある。ただし、「条件」の用法

は確認できる。

(23)目を塞いで居ても心は寐ませぬから、ヤハリ寐る時は寐ますのさ。『浮世風呂』前編下*九オ7（66—1）

(24)そして少しツヽ綱をゆるめますから。い、あんばいに切り口がひらきますのサ　『栗毛後駿足』二編上177・7（92—12）

(25)近年ハ黒羽二重に緋博多の帯。蛇の目の傘といふ。いきにすごいこしらへでいきやすから。ソレ詞も今風に、ヲイ〳〵おとつさん〳〵しやれていふのサ。『八笑人』四編追加上*二十四オ8（250—9）

用例数を示すと次のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 浮世風呂 | 57例 | 内「条件」 | 8例 |
| 浮世床 | 28例 | 内「条件」 | 9例 |
| 四十八癖 | 15例 | 内「条件」 | 1例 |
| 栗毛後駿足 | 5例 | 内「条件」 | 1例 |
| 浮世床三編 | 6例 | 内「条件」 | 2例 |
| 八笑人 | 13例 | 内「条件」 | 3例 |
| 和合人 | 7例 | 内「条件」 | 4例 |
| 箱根草一二編 | 5例 | 内「条件」 | 2例 |
| 箱根草三四編 | 5例 | 内「条件」 | 2例 |

「不定」「ナゼ」は見いだすことができなかった。ノダと異なり、疑問語疑問文に使われる例はなく全て平叙文で使われている。サに指定相当の働きがあっても、ダと等価ではなかったのだと思われる。

なお『浮世風呂』のノサの多くは丁寧語に下接したもので十五例あり、そのうち十四例が女性の使用である。このことは、長崎（一九九八）で既に指摘があり、故に終助詞サは丁寧な会話に用いられていたとする。もちろんそれは事実だが、ノダにも丁寧語につく例が見られる。

(26)賀「サア〳〵ふとんが来たが是をどうしますのだ」『栗毛後駿足』二編上187・3（95—8）

推量表現でも、マスダロウ、ヤスダロウがこの時期に見られる。辻村俊樹（一九六八）にも、後部要素が非敬語形であったものが敬語形で収めるようになる傾向が明治以降認められると述べているが、近世後期ではこのような形がなお存していた。『浮世風呂』にノサが多いのは位相的な側面を反映している

と思われる。ノサの使用は女性48例に対し男性9例、これと対称的にノダは女性10例男性16例で、敬体での使用を除いても位相的な偏りがあると言える。これは、やはり待遇差が絡んでいるものと思われるが、もともと敬語辞ではないのでサの持つ性格との関係も視野に入れるべきであろう。

鯉丈の作品はほとんどが男性なので男女差は確認できない。位相の点で『浮世風呂』は有用な資料であるが、同じく女性が多く登場する『四十八癖』では、ノサ・女性4：男性11、ノダ・女性8：男性11と必ずしも女性に偏っていない。『浮世風呂』の結果のみを以て位相差を言うのは慎重にすべきであると思われる。

## 五

活用語にノを介せず直につくダ（以下、活用語ダ）については、土屋に詳細な論考があり、筆者も拙稿（二〇一六）でそのことに触れた。ここではその補足を行う。

土屋（一九六九）で化政期滑稽本の活用語ダについて以下の指摘がなされている。

・ほとんどが現代語のノダに置き換え可能である。

・指定助動詞の働きはなく終助詞的である。[5]

拙稿（二〇一六）においても、活用語ダがノダ文の中心となる題説構文を構成しているかに疑問を呈した。終助詞的とする土屋説と結果的に通い合うが、土屋の説はダの上が準体句とは認められないということからの、言わば品詞論的なものであり、観点が異なる。

ノダに置き換え可能という点については、ノダのいかなる用法においてなのかを確かめる必要がある。なお、位相については土屋説に異論が無いので言及しない。カウントした用例は全て江戸者である。

結論から言えば、今回の調査でも活用語ダが題説構文を構成している例を拾えず、活用語ダをノダと等価とする積極的な根拠は見いだせなかった。次の例は、引用句を受けているように解せられる。

(27)おれはあぐらかきましただが、おめへはねころばりましただの。『浮世風呂』二編下十一オ8（133—4、5）

(28)名爛成（めいかんじやう）就片鬚毛（じゆかたびんけ）ねへだ　『和合人』三編中二十三オ8（402—2）

(29)塔「コウ江戸向（えどむき）へか、る玉川上水（たまがはじやうすい）は此上（このかミ）だゼ　木賀

「夫じやア爰の水ハ江戸ッ子の腹へはへり損なッた奴だノ　宮二「這へり損なつたら損なつたぎりで能ひよッと爰で飲せられちやア大変だ　木賀「違へねへ決してお時宜ハいたしませんダ」。『箱根草』初編下126・3（156下8）

用例（29）は「大願成就かたじけない」の洒落である。（29）は「遠慮しない」だが、これは字面とは逆で、何かを「遠慮するな」と進められて断る時のことばである。話者は対者に対して丁寧語を用いていない。やはり、引用句のようなものと思われる。

既に土屋（一九六九）に指摘があるように「命令」と解せられる例もある。

（30）コウお酌。てめへに教て置う。縮緬の着物へ酒がかゝつたら熱い灰を上へふりかけて。暫くじつとしてゐるだ」。忽ち燥くから燥いたらば灰をそつくり捨て。跡をはたくがいゝ。『四十八癖』後編4ウ4（240―1）再掲

（31）ソレ腰の手を払われたから。左の手を肩へかけて引く。今度はグット引かへされた心持で。すこしそる（反、左ルビ）だ」。ヅブ「斯か。」アバ「マアそうヨ。そこでト、ム、。そこで胸倉だ。ソレ後から斯う取るハ。とりながらキリキリと引廻す。こつちへむくダ」。ヱヽ。そふ廻れるものか。こつちへヨ。ヤ。そふむいた。そこで両手で拝打に。胸ぐらをうちおとすだ。『八笑人』二編上十七ウ2～6（81―10～）

これをノダの「命令」と見、（28）（29）が引用句を受けているとすれば、活用語ダは指定辞と見ることが可能である。ちなみに、活用語ダの用例数と「命令」「引用」と思しき用例数は

| | | | |
|---|---|---|---|
| 浮世風呂 | 17例 | 内「命令」0例 | 「引用」2例 |
| 浮世床 | 5例 | 内「命令」0例 | 「引用」0例 |
| 四十八癖 | 6例 | 内「命令」1例 | 「引用」1例 |
| 栗毛後駿足 | 0例 | | |
| 浮世床三編 | 0例 | | |
| 八笑人 | 6例 | 内「命令」3例 | 「引用」0例 |
| 和合人 | 2例 | 内「命令」0例 | 「引用」0例 |
| 箱根草一二編 | 1例 | 内「命令」0例 | 「引用」0例 |
| 箱根草三四編 | 2例 | 内「命令」0例 | 「引用」0例 |

で、母数のわりに命令がノダよりも多いが、用例（31）などにかたまっており、特に目立った傾向とは言えない。他は次の「断

定」と見られるものである。

活用語ダには「断定」と見られるものもあった。次の例は「さる」という老女が元遊女の嫁の批判をしている場面である。ここには活用語ダの直後にノダが現れている。前の文は、「髪型ばかり気にして着物には無頓着でぼろぼろに着古してしまう」、後の文は、「着物も洗濯、修繕をすればこざっぱりと着られる」という内容である。

(32)あのまアざまを見なせへ。おめへの方へも行だらうが、椎茸さん干瓢さんといふ天窓をして、なけ無の一ツてうらを着殺に着切て仕まうだ。着物ものおめへ、身じんまくをよくすれば、じゞむさくもなく、小ざつぱりと洗濯ものが着られるのだは。『浮世風呂』二編上*十六オ7（96—14）

以上のように、「断定」「命令」と思しき例はノダの用法と重なる。しかし、「説明」と解せられる例がみあたらない。「条件」「不定」「ナゼ」も見られない。活用語ダは状況との因果関係を保った用法は見いだせないことになる。化政・天保期の共時態としてはノダとは異なる点が多いとすべきであろう。

なお、湯沢幸吉郎（一九五四）では活用語ダを「上品な言ひ方ではない」としている。土屋は宝暦期歌舞伎台帳に丁寧語を用いる文脈の中にも現れていること、お屋敷ことばを話す『浮世風呂』のお初の例があることからこれを退けている。

(33)おしつけ御奉公にお上り遊ばすと、夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ。『浮世風呂』三編下二十七オ3（203—11）

しかし、三馬はこういう人物を肯定的に描いているわけではない。むしろ、「町」の矜恃を保つ滑稽本読者層の共感を得るための恰好のトピックとして使ったと思われる。つまり、右の『浮世風呂』は「馬脚を現」したアイロニカルな表現と解することもできよう。序にあるような教育的な目的は表向きなのではないか。その他にも三馬の言辞には矛盾がある。書いてあることをそのまま受け取ることはできない。したがって「上品な言ひ方ではない」という指摘は、化政期に限って言えば否定できないと思う。

## 六

ノダの推量形ノダロウの江戸語の実態に関して次のような段階的に用法を拡張していったと指摘をした。現代語のムードのノダとスコープのノダとの区別をここにあてはめると、江戸語のノダロウは、ムードからスコープへと用法を拡大しているようである。

1　ノが「物・人」などに置き換えられるもの　（安永～）

2　原因理由を推量するもの

～ハ～ノダロウ　（安永～）

～ハ～カラ～ノダロウ　（寛政～）

3　ナゼを伴うもの　（文政～）

右に示したように、3は文政期まで見られず、しかも江戸期を通してダロウもこの用法を受け持つ。ナゼ～ダロウ、ナゼ～ノダロウが併存しているのである。

(34)福「ヲヤ〳〵ごふぐな大木だ。なぜ伐だろふ　徳「なぜきるだろふとつて。どふしておれにしれるものか。『栗毛後駿足』二編上　175・5（92―4、5）

(35)塔「ヲイ〳〵ア、旨へ上燗〳〵宮公ナゼ是が呑めねへだろう『箱根草』初編中79・4（146下1）

(36)木賀「こりやアわからねへ呑ねへのにナゼ又爰へ這入ツたのだらう『箱根草』二編上171・3　166下17

化政期より前のノダについては未調査だが、化政期のノダには既に右の3が現れており、活用語ダに「ナゼ」は見られなかった。この時期の江戸語でもナゼにはノが必須であったと推察される。しかるにダロウの場合は必須でなかった理由はどこにあるのであろうか。

興味深いことに、疑問にはダロウ、その答えにはノダロウが使われている例がある。

(37)木賀「シタガ気障な事にやア何故手拭ひを冠つて居るだらう　宮「ありやア急度冷性だから天窓を始終包んで居るのだらう。『箱根草』／三編中199上15（327―4）

「不定」のノダにノダロウで応答している例もある。

(38)木賀「アハ、、、何を思ひ出してそんな事を云ふのだ。塔「またなにか伊左衛門の種をおもひ付たのだらう『箱

根草』二編下232・8（179上16）

これらの事実をノダの実態に照らし合わせると、疑問語疑問文がノを取るか否かの問題ではなく、ダロウに指定の機能があったかどうかを疑うべきかと思われる。したがって、活用語を承けるダロウと非活用語を承けるダロウとは別のものと考えられるのではなかろうか。ナゼ～ダロウの問題は、ノダの側すなわち準体助詞介在の問題ではなく、ダロウの側の問題と考えるのが妥当と思う。

## おわりに

今回調査した範囲のノダは、現代語と同じく題説構文をベースとした状況説明の用法を基本とし、理由や未定・未知の要素を含む用法も存在した。これらの点で、化政・天保期のノダは現代語とほぼ同じであったと言えよう。ただしこれはあくまでも、化政・天保期の共時態であって、江戸語の実相を知るためにはさらに遡らなければならない。

関連すると思われるノサ、活用語ダについては、ノダと等価とは言えない状況が観察された。やはりこれらも、特に活用語ダはダロウとの関連において過去の状況を詳細に調べる必要を感じる。

「ナゼ」と共起する場合は、推量以外の文でノが必須であることが確かめられた。ダロウとノダロウの問題を考えるための新たな情報が得られ、推量表現においてノが必須でないのは、ダロウの側にその理由があるとの予測を得た。今後それを検証していきたい。

ダロウとの関係を重視したため、調査結果の考察が不足している点が少なくない。今後の課題とする。

資料間の差異はあったものと思われる。やはり、異なるタイプの作物を広く見渡すことが記述の精度を上げるのに必要と思う。ただそれが作者の違いであるか内容の違いであるかはなお追尋の余地がある。『浮世床』三編を取り上げたのは、三馬と鯉丈とのことばの違いを見るためであったが、分量が少ないこともあって今回は目立った傾向を見いだせなかった。

最後に、直接その論に触れていないが、鈴木圭一（二〇一七）の論考に触発されたところが大であることを付け加えておく。文学作品を用いて語学研究を行う際に、その個々の作品がいかなる事情で成立したかを押さえておくことは必須である。

**注**

（1）板本・影印と活字本では表記が異なっているものもあるが、板本・影印にしたがった。また拙稿（二〇〇七）に述べたように『日本古典文学全集』の『浮世床』には翻刻の誤りと思われる箇所があった。

（2）天保三、四年刊の再版本の題名。『膝栗毛文芸集成』の改題（中村正明）には、序や口絵が削られているとある。

（3）用例数は次のとおり。

浮世風呂　2例　浮世床　5例　四十八癖　4例
栗毛後駿足　1例　浮世床三編　0例　八笑人　9例
和合人　3例　箱根草一二編　3例　箱根草三四編　3例

（4）ノダロウについては、用例（36）～（38）がある。確認要求のダロウは

木賀「アレ那処に居るぜ　塔「ヱ何処に〳〵　木賀「ソレ向ふに生茂ッた木があるだらう那木の根をよく見ねへ白いものがの。ソレ何でも幽印に違へねへぜ　『箱根草』四編上421・6（217下14）

などがある。なお、確認要求のダロウが明和・安永期から確認できることは拙稿（一九　九〇）に述べてある。

（5）拙稿（二〇一七）で原口裕（一九八〇）と書いたが、引用元は土屋（一九六九）である。訂正しておく。

**参考文献**

木坂基（一九七三）近代文章における「のだ」文の変遷と表現価値「新居浜工業高等専門学校紀要」9　『近代文章の成立に関する基礎的研究』（風間書院、一九七六）所収
鈴木圭一（二〇一七）『中本研究　滑稽本と人情本を捉える』（笠間書院）
田野村忠温（一九九〇）『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』（和泉選書）『敬語の史的研究』（東京堂出版）
土屋信一（一九六九）江戸語の「だ」の一用法　『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』所収
土屋信一（一九八七）浮世風呂・浮世床の「のだ」文　『近代語研究』7（武蔵野書院）
長崎靖子（一九九八）江戸語の終助詞「さ」の機能に関する一考察「国語学」192
益岡隆志・田窪行則（一九九二）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
湯沢幸吉郎（一九五四）『江戸言葉の研究』（明治書院）
吉丸雄哉（二〇一五）滑稽本出版年譜稿「三重大学日本語学文学」26別冊
拙稿（一九九〇）江戸語の推量表現について　―明和期～寛政期の洒落本を資料として―「野州国文学」46
拙稿（一九九八）江戸洒落本に於けるノダロウ「静岡県立大学短期大学部研究紀要」11―1
拙稿（二〇〇七）式亭三馬の滑稽本におけるダロウ・ノダロウ「言語文化研究」6
拙稿（二〇一六）式亭三馬『四十八癖』の江戸語について　―ベイ、ダロウを中心として―「言語文化研究」15
拙稿（二〇一七）十返舎一九洒落本の江戸語に関する一考察　―推量表現を例に―「言語文化研究」16